

いりょうつうやくけいはつ 医療通訳啓発セミナー2011

こうてき いりょうつうやくはけん いぎ かんが
～～ 公的な医療通訳派遣の意義を考える ～～

2011年1月8日(土) かながわ県民センター2F ホール

参加者：134名(スタッフ含む)



1 神奈川県かながわけんの医療通訳派遣システムいりょうつうやくはけんの実績報告じっせきほうこくと問題点もんだいてん

たかはしもと お
高橋元央 (MIC かながわ プログラムアドバイザー)

MIC かながわが設立されるに至った経緯けいゐ、神奈川県かながわけんの医療通訳派遣システムいりょうつうやくはけんの流れなが、実績・成果じっせき せいか、問題点もんだいてん、課題かだいについて、パワーポイント資料しりょうを使いながらわかりやすく説明せつめいしました。メリットがデメリットより大きいのはわかっていますが、それ故に問題点もんだいてんが大きく浮かび上がり、課題かだいとして残のこされています。

かだい [課題]

◎システムの運営主体うんえいしゆたい

- ❖ 少数言語しょうすうげんご (通訳スタッフつうやくを確保かくほすることが難むずかしい)
- ❖ 派遣病院はけんびょういんの拡大かくだい (現在げんざいは県けんとの協働事業きょうどうじぎょうは17病院びょういんだが、このままで良いよのか)
- ❖ 費用ひようの検出ねんしゆつ (システム自体じたいを回すための費用まわをどのように検出ひようするか。頭あたまの痛い問題いた もんだい)
- ❖ 医療通訳スタッフいりょうつうやくの地域偏在ちいきへんざい (狭せまい神奈川県かながわけんといえども、無理むりして遠くとの病院びょういんまで行いってもらっている言語げんごもある)
- ❖ 患者かんじやからの依頼いらいへの対応たいおう (システムげんそくの原則びょういんとしては病院いらいからの依頼うのみを受け付けているが、このままで良いよのか。)

◎医療通訳スタッフいりょうつうやく

- ❖ 医療以外いりょうがいの問題もんだいへの介入かいにゆう・サポートおお (多くかんじやの患者せいが生活全般せいかつぜんぱんに関わる問題かかを抱えており、サポートもとを求めて来る。医療通訳いりょうつうやくとしての役割分担やくわりぶんたんの範囲はんいを守ることまもで、サポートできないということかつとうに葛藤かんを感じている通訳スタッフつうやくも多い)
- ❖ 登録後のレベルチェックとうろくご (特に少数言語とくにおいては、今後しょうすうげんごの経験こんごによりレベルアップけいけんすることを期待きたいして登録とうろくしていただく方もいる。しかし、その後のレベルチェックかたがなかなかできない)

◎医療機関いりょうきかん

- ❖ 医療機関内いりょうきかんにないでのシステムししの周知不足しゅうちぶそく (同じ病院内おなでありながら医療通訳派遣システムいりょうつうやくはけんについて知らない医師いし・看護師かんごし・スタッフがいる)
- ❖ 医療従事者いりょうじゅうじしやの医療通訳いりょうつうやくへの態度たいど (通訳つうやくの入り方はいについてまだまだ理解りかいされていない部分ぶぶんがある)
- ❖ 通訳つうやくの必要性ひつようせいについて患者かんじやとの乖離かいり (検査けんさして数値すうちを見るだけだから通訳つうやくは要いらない等とう、感覚かんかくの違いちががある)

◎患者かんじや

- ❖ 通訳つうやくを指名しめいしたい
- ❖ 毎回まいかい同じ通訳おなに来てもらいたい

(MICのルールしえんしやとしては、支援者いりょうつうやくではなく医療通訳スタッフはけんとして派遣いしているの、依存関係いそんかんけいができるのを避さけるためにも、患者かんじやからの希望きぼうは原則げんそく受け付けない)



2 神奈川県医療通訳派遣システムの今後について
(パネルディスカッション)

ファシリテーター：沢田貴志氏

パネラー：三浦知人氏／佐野晴美氏／岩本弥生氏／
佐藤ペティ氏／鶴田光子氏

佐藤ペティ (MIC かながわ中国語医療通訳スタッフ)

病は時も場所も国籍も選ばず人を襲う。命にかかわるような病気になったときの母国語の重みを感じている。丸6年医療通訳をしてきているが、いつも緊張感を持って現場に入る。

佐野晴美 (社会保険横浜中央病院 医療福祉相談室係長 ソーシャルワーカー)

医療制度や社会保障制度をわかっているソーシャルワーカーが窓口になることで外国籍の患者さんの問題解決の糸口を見つけないことができると思う。システムのデメリットとして、時として現在の病診連携というシステムから外れてしまうことがある。

岩本弥生 (MIC かながわポルトガル語医療通訳スタッフ、通訳コーディネーター)

登録通訳がいつでも活動可能なわけではない。特に少数言語ではコーディネートに苦労する。ボランティアの通訳スタッフをどうフォローして行ったら良いか。悩むところである。

三浦知人 (川崎市ふれあい館館長)

ふれあい館は外国籍当事者の社会活動を応援している立場。日本で人間としてしっかり生きること、情報を得ることをあきらめないように背中をちょっと押してあげる。そういう立場で支援をしている。

鶴田光子 (MIC かながわ理事長)

本業はソーシャルワーカー。財政困難な県が予算をとってくれたことに感謝している。MIC は大きい組織になってきたが、志を忘れず、患者さんに寄り添う活動でありたい。その原点を失いたくない。

<会場からの質疑応答 抜粋>

Q. MIC のボランティア通訳とプロ通訳の違いはありますか？

A. 患者さんが連れて来る通訳は往々にして、通訳が全てを答えてしまい、患者さん自身の答が見えない。MIC の通訳は、中立の立場で忠実に訳してくれていると感じる。また、MIC の通訳は固定されないことが良いと感じている。長く固定して入ると、やがて友人、家族と同じ目線になりがちだからである。

(佐野SW)

Q. 通訳派遣の多い人、少ない人で、どのくらいですか？ 3000円でやっていけるのですか？

A. 多い人は週に3、4回。少ない人は年に1、2回。言語によってもずいぶん違う。お金の多寡に係わらず間違っただけはないというのは同じ。3000円だからこのくらい、と考えている通訳スタッフは誰もいない。

(岩本)

A. 困っている人に手を差し伸べるといふ気持ちで、納得して3000円を貰っている。(佐藤)

Q. 医療通訳の必要性について、行政に対してはどのように働きかけたら良いですか？

A. 少しずつ共感してくれる人を増やしていくということが大切。(三浦)

A. 保険の点数化、あるいは加算されるようになると良いと思う。可能性がないわけではない。機会を見つけてはアピールしている。(鶴田)

さわだたかし (MIC かながわ理事、医師)

MIC が行っている通訳派遣事業はいろいろな背景をもった団体、個人が係わることで成り立っている事業であり、財政的に厳しい中でボランティアの方々からの熱い思いに支えられている。行政にも積極的な関わりを望みたい。また、神奈川だけでなく、各地で取り組んでいただき、制度化を広げて行ってもらえたらと思う。

3 共通基準制作の経緯と基準の内容説明

にしむらあきおし (MIC かながわ プログラムアドバイザー)

昨年8月に京都で開催された『医療通訳全国会議』に先駆け、医療通訳共通基準の策定が行われました。内容についてはMIC かながわニュースレター『虹』No. 56 で紹介。

【参加者のアンケート抜粋…視点別】

医療機関関係者より

●通訳派遣システムが病院内部で周知されていない。

医療通訳に対して

- 人の命に関わる仕事なので、認定制度、独占制、収入の確保は必要ではないか。
- あまり理想が高いと、新規参入者のハードルを高めてはしまわないだろうかとの印象が残る。
- 「通訳の質が大切」という話に、語学力の保持、スキルアップの重要性を感じた。また、「志」を忘れずに、患者に寄りそう」という活動の原点を考え直した。
- 医療通訳を取り巻く社会の状況を知り、考えることができた。財源の問題はあるが、今後も継続していく必要がある、有意義な活動だと実感。
- 医療通訳は専門性が求められる分野であると痛感した。

システムについて

- 療養給付と関係ないサービスの扱いにある通訳、何とか改善できないものか。
- システムで統一の初診問診票を作り、受診前に患者がMICで訳してもらい初診時に持参すれば、医療側もスムーズに診察につながり、助かるのではないか。
- JICA、青年海外協力隊の帰国ボランティアの活用、JICA事業と連携ができないか。
- この制度を採用する自治体が全国に増えることを期待したい。

セミナーについて

- 立場の違う方の話が聞けて参考になった。
- 限られた時間の中でのことなので、もっとシステム向上のための議論に時間を費やしてもらいたかった。
- メモをとるためにも机のある設営を希望する。